

## 和の継承

### いま —現代と融和する漆—

A2201601 秋山 由佳

#### 研究の背景

半世紀前に比べ日常生活において和服を着用する機会は著しく減少したが、儀式や冠婚葬祭の場においては現在でも80%以上の着用が見られる。そういう視点から和装は日本のフォーマルウェアとしていまだ重要なポジションにあると考えられる。つまり着用の頻度は少ないが必要であり、そのためにはしっかりとした保管方法を考えなければならない。このような観点から、現代の生活様式にも合った和装の衣装箱について研究制作を行う。

#### 研究の目的

漆芸技法を用い、桐箆笥の機能も生かすことを考え木地蒔絵の技法を応用しながら和を身近に感じられる構成とする。また、使いやすさを求めた形状、デザインにすることにより若年層にも受け入れ易く、和の文化の継承を促すことを目的とし制作にあたる。

#### 研究のプロセス

- 和装の種類、TPOに合わせての選択やマナーの再確認…冠婚葬祭によって着用する着物が異なる。
- 収納方法の調査・研究…着物にとって湿気は大敵であり、収納・保管の面でもっとも懸念すべきことである。よって、湿度に合わせて膨張・収縮する桐が保管に適している。
- 保管に適した形状の考察…動かしたときにズレないサイズに適したもので、シワ防止のため五枚以上重ねないことが望ましい。
- 目的に沿ったデザインの研究・考察…桐の特性を妨げないように木地の部分を残す必要がある。→木地を生かした伝統漆芸技法の研究として、木地蒔絵での提案

#### 〔制作過程〕

- 寸法決定
- デザイン決定
- 技法試作
- 図面
- 木地制作(図1参考)
- 錫金貝貼り(図2参考)
- 図案に合わせて切り取り(図3参考)
- 下地(図4参考)
- 塗り
- 蒔絵



図1 木地(正面)



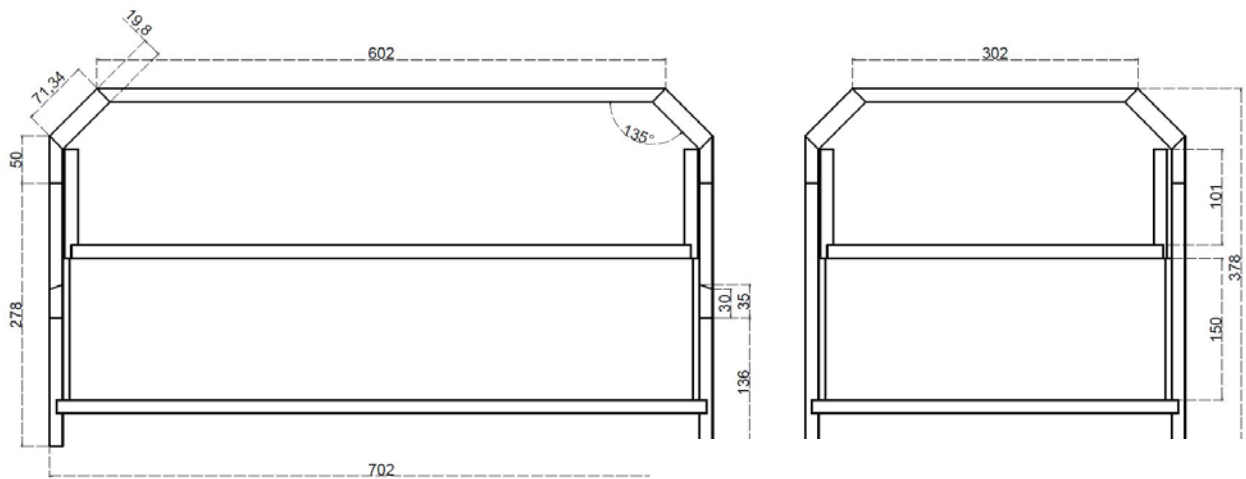
図2 錫金貝貼り



図3 図案に合わせて錫金貝を切り取る



図4 文様部分に下地を施す



### 成果物(完成作品)

冠婚葬祭に対応できる留袖、喪服、訪問着とそれらに必要な小物が入る衣装箱で、桐を用い木目を生かす木地蒔絵を施した。着物を受け継いでいくその大切さを、容易に開けてはならない大切な箱である、玉手箱をイメージし、熨斗文様を全体に表した。

構造は、掛子で二段になっており、下に着物、上に小物類を収納できるようになっている。また、持ち手は主張しすぎないようにし、指先に力をいれやすいよう傾斜をつけた。

### 考察

「桐箆笥」といえば、大きく存在感があるもので、一人暮らしのアパートのような狭い空間には、圧迫感をあたえてしまう。そこで、最低限の着物やそれらに必要な小物類を収納できるだけのおおきさのものを制作することにより、存在感や保管の難しさから懸念しがちな着物の所持をしやすくなるのではと考え研究にあたった。

着物のたたみ方の問題で幅をとる長さを三つ折りサイズを採用することにより、幅を抑えることができた。また、冠婚葬祭に必要な「留袖」「喪服」「訪問着」を収納できることを前提に、それらに必要な帯や、小物類と一緒に保管できるようにすることで、必要な時に探すことなく使用できるようにした。この研究を通し、これから独り立ちをする若者が着物を所持し、また次の世代へと受け継いでもらいたい。